



企画にあたって

安齊俊久

(北海道大学大学院医学研究院循環病態内科学教授)

緩和ケアはがんだけでなく、生命を脅かすすべての疾患に対して考慮すべきものとされ、終末期に緩和ケアが必要とされる疾患のなかでは、循環器疾患は最も多くを占める。

循環器疾患患者は、身体的、社会的、精神・心理的あるいはスピリチュアルな苦痛を少なからず抱えており、これらを予防し取り除くために、多職種チームによる多面的アプローチが早期の段階から必要である。また、がんと同様あるいはそれ以上に予後が不良とされる心不全においては、将来の状態の変化に備えるために、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）といわれるプロセスが重要であるが、十分に普及しているとはいえない。

本企画においては、循環器疾患における緩和ケアのあり方について、緩和ケア医、精神科医、循環器医それぞれのお立場より詳述していただいた。循環器疾患に対する適切な緩和ケアの普及により、患者・家族の生活の質（QOL）が少しでも改善されることを願ってやまない。